アーカイブ通信 No.31

No.31
2024.7.1

◆編集・発行：
ネットワーク・市民アーカイブ
http://www.c-archive.jp/
事務局
〒189-0012 東京都東村山市萩山町 2-6-10-1F
tel･fax：042-396-2430
E-mail：info@archive-tama.sakura.ne.jp

会員募集中

◆正会員１口6,000円、賛助会員１口3,000円／年
ゆうちょ銀行　振替口座 00120-9-729226
口座名：市民アーカイブ　　※団体会員２口～

開館10周年記念集会報告　2024年2月12日

市民活動資料保存・活用 次の10年を描く

～「市民アーカイブ多摩」のこれまでとこれから

2024年は市民アーカイブ多摩が開館して10年の節目にあたります。市民活動資料を収集・保存・活用してきた小さなアーカイブも、山あり、谷あり、さまざまな出来事がありました。

開館時にあたって建物の改修の設計を担っていただいた細谷悠太さんと9周年集会で講演いただいた岡部明子さんを迎え、この間に得られた体験と知恵を振り返り共有しつつ、これからの10年を見据えた夢を描く集会を開催しました。（記録・編集部）

◆10年の歩み～実践の蓄積

前半はまず、当会設立前史から現在に至るまで「市民アーカイブ多摩」の歴史を振り返りました。また、組織の変遷や他団体との協働の広がり、財政・資料数・入館者数の推移、10周年を機に本格化している法人化に向けた取り組みなど、現在の状況も共有しました。

◇会員に支えられ運営委員会を中心に

市民アーカイブ多摩を運営する任意団体「ネットワーク・市民アーカイブ」は、毎月1回開催する運営委員会で運営上の課題を検討してきました。会設立からは16年となり、その時々に必要となった部会（企画・広報・資料）やプロジェクト（設立構想・外部調査・普及啓発・法人化・募金・開館準備・長期計画・資料を読む・目録）、当番連絡会議などを立ち上げました。

開館当初の施設・消耗品整備、経過をまとめた『ようこそ！　市民アーカイブ多摩へ』作成時、会計推移を見ると、岸中書庫整備の改修費や書架調達などがあったため、大幅な支出の伸びが確認できます。時に助成金を申請したり、寄付金に助けられながら、会員数は14年度の115人から、23年度の166人と1・5倍に増え、会費が収入の半分以上を占めているのは心強いことです。

◇さまざまな団体との連携

また、現在の活動が、事務局を委託しているNPO法人市民活動サポートセンター・アンティ多摩や、建物を使用させていただいているNPO法人グリーンサンクチュアリ悠をはじめとして、さまざまな市民団体に支えられていることを確認しました。毎年市民組織などが運営する資料館訪問も継続しており、互いに交流しながら運営や整理などについて学んできました。

23年11月には、同じように市民活動資料の保存にかかわる法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズ、立教大学共生社会研究センターと合同のシンポジウムを開催したほか、多摩地域の図書館・公民館・資料館の調査やヒアリングも行っています。

◇増え続ける資料

所蔵するミニコミは開館時に1159タイトルだったものが10年で2099タイトルと、市民アーカイブ多摩でほぼ倍増したのは特筆すべきことです。ミニコミだけでなく、図書・チラシ・パンフレットなど未整理の資料もたくさんあります。月6、7回（毎週水曜、第2・4土曜日）の定期開館が維持され、レファレンスや訪問・見学、さまざまな形での交流が日常的に行われていることが、資料の増加につながっているようです。

◇来館者数も増加

来館者数は着実に増加しており、特に多かったのは15年度（171人）と20年度（200人）でした。15年度は開館したばかりで、見学や取材が多く、20年度はコロナ禍で他施設が閉鎖された中でも工夫しながら開館体制を維持

したこともあり、利用者が増えました。定期開館を維持するため、現在は5人の当番担当者と9人のボランティアが役割を担っており、整理方法の研修を実施しながら、丁寧な資料整理を心がけています。

市民アーカイブ多摩の資料収集において課題となるのは、空間・人手・財源です。増加する一途の資料を保管する場所が何より必要ですし、活動の幅を広げていくための人手や財源もまだまだ十分とは言えません。いまは何とか活動を展開できているけれども、これから先の10年を見据えたときに、会として何らかの対策を取らなければならないという認識を共有しています。

年度	開館日数	来館者数
2014	76	60
2015	78	171
2016	74	94
2017	74	105
2018	72	75
2019	71	79
2020	71	200
2021	72	115
2022	72	195
2023	72	207

◆次の10年～夢を描く

後半は、まず今後10年を見据えて現在活動中の長期計画プロジェクトの取り組みを紹介。法人化や募金運動のためにも新しい「市民アーカイブ多摩」のイメージを作る必要性を説明しました。資料の増加や、安価で建物を提供してくださるグリーンサンクチュアリ悠への依存も大きく、ハード面においてもこのままでは行き詰まることが予想され、新しい姿を描いていく必要があります。

続いて当館の改装を手がけてくれた建築家の細谷悠太さんをコーディネーターに、これから先の市民アーカイブ多摩の青写真を模索しました。

◇好きな場所からヒントをもらう

手始めに細谷さんから「本のある空間で好きな場所」というお題が出され、参加者それぞれが本にまつわる思い入れのある場所を発表しました。ひと口に「場所」と言っても、図書館や書店に限らず、お店やイベントなど本はあらゆるところにあります。市民アーカイブ多摩の改善点の指摘など、議論は盛り上がり、具体的なイメージや夢も広がりました。

細谷悠太さん

細谷さんからは、「落ちついた場所」としての空間、「お茶が飲める」「座れる」「自然光が感じられる」などの＋αの要素。さらに「そこにいる人の個性が見えること」「自由を束縛されないちょうどよいルールがあること」「思いがけない出会いがあること」の大切さが話されました。また、当館で扱う「ミニコミ」とは何かを、関わっている人たちでより明確化し、伝えることの重要性を挙げられました。

◇緑地の中で、今できることを

岡部明子さん（東京大学・建築学）からは「皆さんは、場所はここ（現在の市民アーカイブ多摩）が一番良いという前提で話されている」という指摘がありました。雑木林に囲まれた現在の場所を皆が好きであること。また、高校生へのボランティア呼びかけ、ミニコミを知らない通りがかりの人でもなじみやすい展示、綺麗なトイレが備わっていたり、お茶や緑地を楽しめる空間という環境整備も大事なことをアイディアとして提案いただきました。そして、夢を描く前に現在のままでも工夫してさらにできることはあるのではないかとのアドバイスがありました。

岡部明子さん

まだ会として具体的に目指すべき指針を定められてはいませんが、これまでの10年を振り返って現状の課題をあぶりだし、さまざまな人とともにこれからの市民アーカイブ多摩の姿を持ち寄ることで、気持ちも新たにこれからの10年について目を向ける機会となりました。今後も折に触れて市民アーカイブ多摩のあるべき姿を考えるイベントを開催していきたいと考えています。

ミニコミの「灯」を引き継いで

～試行錯誤と決断の 10 年

増沢　航
（ネットワーク・市民アーカイブ）

私は今回、このイベントで市民アーカイブ多摩の10年を振り返る前半について報告をしました。気づくと私自身、2009年にネットワーク・市民アーカイブの運営委員になってから、今年は15年目の節目にあたっているようです。

幾度となく触れていることですが、市民アーカイブ多摩の資料の源流は、もともと廃棄の危機にあった都立多摩社会教育会館内の市民活動サービスコーナー（以下コーナー）が収集してきた段ボール550箱分の市民活動資料です。

私が関わるようになったきっかけは06年から市民活動サポートセンター・アンティ多摩がアパートの一室で試行的に開設していた「ミニコミ広場」という拠点を訪れたことです。そこでは、現在の市民アーカイブ多摩と同じように、ミニコミの収集・公開のみならず、「おはなし箱」という形で、市民活動やミニコミにかかわる方々のお話を聞く機会も開催されていました。

開館前の大きな決断

当会は月1回の運営委員会を開催してきましたが、中でも白熱した議論を繰り広げたのが、市民アーカイブ多摩開館に向けた準備の時で、いくつもの重要な決断をしていきました。

まず11年に法政大学環境アーカイブズに550箱の資料を寄託したことです。コーナー時代の資料は膨大で、保存先という大きな課題が解決した瞬間でもありましたが、多様な意見が噴出しました。

もう1つは13年にグリーン

サンクチュアリ悠の岸中友子さんとの縁で、玉川上水からほど近い、雑木林の一画にある戸建て住宅を資料センターとして利用できることが決まったことです。建築士の細谷悠太さんに設計を依頼し、基金を使って住居の改装工事を行ったことで、コーナー閉鎖後の02年以降にアンティ多摩が収集してきた資料を保存でき、会の活動の拠点とすることもできました。

場を運営する大変さ

市民アーカイブ多摩が開館するにあたって、組織や運営体制はどう整備するのか、さまざまな立場の運営委員が夜遅くまで議論を重ね、当会や市民アーカイブ多摩の体制を形作っていきました。会や建物の名称などの検討には特に長い時間がかかりましたが、だからこそ「こうだったら良かったのに」といった後悔のない形で土台を築くことができたのではないかと思います。

紆余曲折の末にスタートした市民アーカイブ多摩も今年で丸10年になりました。この10年間はコーナー時代を超えるスピードで資料数も増え、会として活動の幅も広がってきました。

場所・人・資金の課題は続く

ただ、一度は解決に至った資料保存場所の問題も、増え続ける資料を前にしては依然課題として残っています。設立当初14人だった運営委員も9人になり、活動を支える人員もまだまだ足りません。活動を展開していくための資金も会費でまかなうことはできず、助成金や寄付金などが必要不可欠な状態です。

けれども私たちは市民活動資料を集めたアーカイブ活動の足を止めることはできません。そもそも理不尽な形で処分されそうになった資料をどのように次に引き継ぐかを考えていたメンバーが集まり、試行錯誤を繰り返しながらここまできたのです。

拡がった資料・人・信頼

10年の活動を通して、その資料そのものだけでなく、ミニコミを作る人、読む人、活用する人、そのつながりも格段に増えていきました。こうした方々に支えられていることを自覚しつつ、10年間に積み上げてきた責任も感じています。だからこそ資料や人とのつながりが生み出してきた「灯」を消すことなく、次の10年に引き継いでいかなければなりません。

いかに市民活動資料収集の活動を引き継ぐのか、その1つの道として、現在は長期計画プロジェクトを立ち上げ、NPO法人化の道を探っています。まだまだ課題が山積する状態ですが、今回のイベントのように、多くの方々と交流しながら少しずつ解決するための努力を重ねていきたいと考えています。

（ますざわ・わたる＝代表）

ミニコミへの「窓」を開こう

～目録が支える次の10年

平野　泉
（立教大学共生社会研究センター）

市民の、市民による、市民のためのアーカイブが10周年！　ほんとうにおめでとうございます。私にとって市民アーカイブ多摩のみなさんは、ミニコミとの付き合いという点では大先輩であり、コミュニティづくりという点では師匠です。これからの10年に向けては、NPO法人化などの重要な議論がなされていくと思うのですが、そんな局面で私に書けることって？　と悩んだ末に、比較的地味な部分について書いてみることにしました。

世界に通じる窓

『アーカイブ通信』30号（24年3月）に、国立国会図書館でお仕事されていた中井万知子さんの「緑蔭トーク」報告が掲載されています。資料整理経験者なら誰でも、同館にとっての目録が「世界に通じる窓だった」という中井さんの言葉に大きくうなずいたのではないでしょうか。私の勤め先である立教大学共生社会研究センター（以下「センター」）でも、ミニコミの書誌情報をデータベースにして公開しています。しかし、オンラインで検索する際の利便性はいまひとつで、建付けが悪くてちょっと開けにくい窓のような状態なのが悩みです。

そのデータベースに登録されているミニコミの大部分は、市民アーカイブ多摩と同じく市民が市民のために運営していた住民図書館（1976―01年）が収集したものです。住民図書館でも、やはりボランティアのみなさんが、膨大なミニコミを使いやすくするために工夫をこらしていました。

分類の変遷・悩みゆえの議論

その決定打ともいえるのが、88年からのデータベース作成、『ミニコミ総目録』（平凡社、92年）刊行、そしてその過程で練り上げられた住民図書館独自の「ミニコミ分類表」です。住民図書館からセンターに移管された古いファイルには、この分類表の第1次案から第4次案までが挟みこまれています。「第1次案」ではトップ項目だった「A　反戦・反核・平和」が、「第2次案」では「K」まで移動し、代わりに「A 環境・公害」がトップ項目になったりしていて、91年の最終版が固まるまでには様々な議論があったことが推察できます。

「分類表についての検討課題」という資料には、例えば「トマホークはK1反戦反核平和か、K3反基地か」「アルコール依存症はE2食生活でよいか」など、ミニコミを分類に当てはめる際に生じうる疑問が列挙されています。市民アーカイブ多摩でミニコミを整理しているみなさんにとっては、まさに「あるある」な話なのではないでしょうか。

住民図書館や市民アーカイブ多摩のように開架式を採用

している場合、合理的な分類により配架されていることで資料は格段に探しやすくなります。しかしミニコミは気ままで自由で、これほど分類しにくいものもありません。例えば、あるミニコミの13号までは「分類Aがピッタリ！」に思えても、14号あたりから「分類Gがよかったかも……」と心が揺れてしまったり。でも、そうした悩みやそこから生まれた貴重なノウハウについて、団体の壁を超えて真剣に議論したことってあったかなあ？と、今回住民図書館のみなさんが残してくださった資料をみて思ったのです。

次の10年を支えるために

ミニコミを所蔵・公開している団体で、カネやヒトが足りているところはありません。だからこそ、ミニコミの分類にせよ、目録データの作り方にせよ、ミニコミにまつわる技術的な部分にみがきをかけるには協力が必要です。センターでも現在、アーカイブズ資料に関する仕事の進め方全体を見直しています。もっとみんなで力を合わせて、市民活動の資料整理にまつわる、みんなで共有できる方法を考え、質の高いデータを作り、可能なら共通のプラットフォームで公開していきたいものですよね。そういう意味で、市民アーカイブ多摩で進む新しい目録づくりが、貴重な所蔵ミニコミの目録という「世界に通じる窓」をより大きく開け放つための第一歩に、そして今後10年間の活動を支える基盤になることを期待しています。

（ひらの・いずみ＝会員）

私と市民活動資料19

公共的課題を市民本位で解決するために

～私が身近に関わった事例から～

戸室幸治（三多摩図書館研究所）

ミニコミ配架拒否を撤回

「くらしと福祉をよくするあきる野市民の会」は、障がい者、高齢者、医療、福祉などについて学び合い、情報交換・提供をする団体です。市民が大切にされ、だれもが暮らしやすい街になるように、との願いを込めて、介護保険制度がスタートした2000年10月に十数名で発足しました。介護保険関係の『事業所案内』や『介護保険、現状と課題』といった冊子の発行。映画会、講習会、講演会、シンポジウムなどの主催、阿伎留医療センターとの年1回の話し合い、秋川駅エレベーター設置の運動と、幅広い運動を展開してきました。また、これらの活動の内容を広く市民に知らせるため、隔月で『やまぼうし』を発行し、市内施設などに配架してきました（22年9月で終刊）。

私がこの会を知ったのは、15年11月号の『やまぼうし』の巻頭言「新しい市政に期待する」の中で「国会で決議されてしまった戦争法案」と掲載したところ、「戦争法案」という用語が問題視され、中央公民館に配架を拒否されたことがきっかけです。

背景には同年9月、集団的自衛権の行使を可能とする安全保障関連法が成立した直後ということもあり、さいたま市三橋公民館で起こった「九条俳句訴訟」と同様に、あきる野市中央公民館での「ちらし配架不許可事件」として知られることになります。[※1]

様々な運動の結果、16年8月、教育委員会が不許可を撤回し、その後は公民館主催の市民企画講座も幅広いテーマで、開かれるようになりました。

地域図書館閉館を阻止

公共図書館の運営にとって極めて厳しい時代が続いています。そのような中、23年7月、待望の多摩市立中央図書館が開館しました。「多摩市に中央図書館をつくる会」が設立されたのは00年2月ですので、実に23年5カ月の歳月が流れたことになります。この会は、本当に多くの「学習会」（講演会など）や「見学会」を実施し、その都度会の活動内容をまとめた『多摩市に中央図書館をつくる会ニュース』を不定期で発行してきました。

中央図書館計画を進める過程で多摩市は13年に、市内7館の地域図書館のうち4地域図書館の廃止・縮減しようとする計画を発表しました。

それに対して、4地域図書館の各「存続を考える会」が共同で「存続」の署名を1万8千筆以上集めたり、『市民情報紙』「図書館をなくさないで」を2万部印刷して配布し、大きな反響を呼び、この計画をストップさせたのでした。[※2]

課題を知らせ・行動を伴う

10年に市民活動支援のためのミニコミ資料室をつくる会が刊行した『市民メディア・ミニコミⅡ』は多摩地域で発行される200誌のミニコミを紹介しています。

「はじめに」の中で、「サークル・研究団体・地域団体・住民運動・市民運動など、市民自身が必要に応じて、自発性によって集まり、共通の目的のもとに協力しながら行う活動」を「市民活動」、そして「それらの活動の中で生み出される、会報・機関誌・広報誌、文集・報告書・記録集、ビラ・ちらし・ポスターなど、たくさんの資料を「市民活動資料」と説明しています。

そこで取り上げられているミニコミを含めて前述したような資料と、それらを発行する市民活動団体が無ければ、多摩地域における公共的課題を知る手段も、このような活動の成果も得られないことになります。市民活動資料も市民活動団体もその存在は極めて大きいと言えます。

（とむろ・こうじ＝会員）

※1　拙稿「表現の自由を真っ向から否定する暴挙―あきる野市中央公民館の取扱基準問題―」多摩住民自治研究所『緑の風』2016年7月号参照。

※2　特集「多摩市の図書館」三多摩図書館研究所『図書館研究　三多摩』第14号（24年4月）参照。

ミニコミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信（ミニコミ）を、発行者の方に紹介していただきます。

しのばず自然観察会より

しのばず自然観察会は不忍池を含む上野公園を拠点に、都市の自然を考えるというテーマで１９７５年から野外観察を中心に活動している市民団体です。発足10年記念に上野公園の総合調査を行い、上野公園の自然と歴史を見直す活動に広がって行きました。また、上野公園の環境保全に意見表明をしたり、保護運動を行ってきました。当初は別に会報を発行していたので毎月の活動案内として葉書で出していました。担当者の事情で会報発行がなくなってからは、会の月刊情報紙となりました。

しのばず自然観察会より2024-5 P1
会員の皆様へ：年会費納入の情報：郵便切手の宛名下の数字参照、2024は2024年度分納入済

しのばず自然観察会より 2024-5 2024.05.04

2024年5月の活動 不忍池 定点観察 5月19日(日)

集合：午前１０時 不忍池 蓮池南西端 緑の小旗あり（野外ステージ西側、 湯島天神下交差点寄り）
今回は雨天中止

持物：筆記用具、双眼鏡、飲み物、雨具（マスク、帽子、昼食、防寒衣）
解散は午後１時頃ボート池畔または蓮畑 参加費不要 非会員の参加も歓迎

2024年 4月の臨時活動 谷中霊園ニリンソウ観察会より

区画の左2/3はどがニリンソウ(下半分ほどが草刈り済範囲)

４月６日(土)、上野公園上空には花見歓材のヘリコプターが旋回していました。空模様に気を揉んだものの花曇りのもと、昼頃には暖かくなった谷中霊園にも、花見客が繰り出していました。ニリンソウの花見を想定して組んだ臨時観察会には 11 名が参加しました。ただ、3 月に乗り日があったためか、ニリンソウの花はようやく咲き始めの状態でした。2 か所ある群落の一つをまず見ました。ここではコバンソウは侵入し始めで、10㎡ほどの面積に数えてみるとニリンソウの畳か花がめるショート(花茎)が 45 本ありました。次にコバンソウ侵入地の群落ですが、15㎡ほどの面積のうち1/3位にもとりとニラが生え、残りの面積がニリンソウでした。3 月 15 日にしのばず自然観察会会員が霊園管理所所員の立ち合いのもとで、ニリンソウ生育範囲の1/4程度を柄付鋏で草刈りをしましたが、刈り残した茎葉が６日には伸びていました。

- 1975年創刊、年12回発行、70部、B5判２～６頁
- 年会費：2000円
- tel：03-3828-8775（小川）
- 当館所蔵：2002-5～2024-6号
- 2024-5号内容：５月不忍池定点観察予定、４月臨時活動「谷中霊園ニリンソウ観察会」より、不忍池定点観測報告、観察会感想ほか

現在の内容は、定例観察会の予定および前月活動の事務的報告と個人の観察記録、それに観察した動植物のリストや、年１回ですが不忍池の水鳥個体数・ＣＯＤ簡易測定結果データ、公園行政への意見などです。会員には郵送していますが、数日後に会のＨＰで公開し、２００６年１月号以降が見られます。

もともと日程や行事結果の事務的な通信でしたが、野外活動に参加できない会員から「観察の内容を読みたい」という要望があり、観察した生物や地域の状況を載せ始めました。そのうち、個人の観察記録を毎月書いてくれる会員が現れ、より臨場感ある記事になってきました。これらに対して喜んでくれる会員がいて、励みになります。

コロナ禍前までは、野外活動のあとに有志の会員が近くの会員宅に集まって、おしゃべりをしながら通信を折っては封筒詰めをしていました。その後、密を避けるため、現在は代表者が原稿作成から発送作業までを行っています。発送数が半減したのと、定年退職後で時間のやりくりが可能になったおかげでした。印刷も自宅でやっていますが、おかげで個人所有のプリンターの寿命が短くなって、数年おきに買い替えています。発足当時はガリ版刷りでしたが、今ではカラー写真を載せられるという時代の変化を感じます。

他地域・他団体の情報も時に交えながら、自然やまちとそれらにかかわる人々の過去・現在を伝えたいと続けてきました。スペースが限られているため内容は十分ではありませんが、地域から、住民・市民の立場からの発信をこれからも心掛けていきたいと思います。（小川潔）

ＭＥＷ（ミュー）通信

ＮＰＯ法人ミューは、東京都武蔵野市を拠点に活動している法人です。１９９１年４月に精神障害のある方を対象とした共同作業所（ワークショップＭＥＷ）を設立したのが始まりとなります。その後、97年に就労を支援する事業（就労支援センターＭＥＷ）、２０００年にＮＰＯ法人格の取得と同時に、地域活動支援センター事業（ライフサポートＭＥＷ）を開始しました。さらに05年にグループホーム（ミューのいえ）を開設しております。

その後、障害者総合支援法のもと、事業の再編等を経て、現在は『就労継続支援Ｂ型・就労定着支援』（ワークショップＭＥＷ）、『地域活動支援センターⅠ型・指定特定・指定一般相談支援』（ライフサポートＭＥＷ）、『共同生活援助・自立生活援助』（ミューのいえ）の各事業を行っております。また、武蔵野市からの委託事業として、『武蔵野市障害者就労支援事業』、『武蔵野市精神保健福祉啓発事業』、『武蔵野市市民こころの健康支援事業』を実施しています。その他、当法人は地域との交流を重視し、地域に根差した法人運営を目指していることもあり、コミュニティ食堂であるＭＥＷ食堂（２か月に１回）の開催や、地域のイベントやお祭りにも積極的に参加させていただいております。

このような法人活動を少しでも多くの方に知っていただくため、『ＭＥＷ通信』を年４回発行し、当法人の会員及び関係機関へ１回につき６００部程度発送しています。第１回目の発行は92年４月となっており、32年の歳月を経て現在（24年７月時点）は１２８号を発行することができました。この間、用紙サイズやレイアウト変更を行ったり、カラー印刷に変更するなど、より理解しやすくなるように修正を加えてきました。現在の掲載内容は、法人の活動報告（法人全体のイベントや研修会報告など）や理事会報告、各事業所で行っている活動内容を画像や挿絵を交えて掲載しております。通信の封入・封緘やラベル貼りは、Ｂ型作業所のメンバーの作業にもなっております。

今後も、当法人の活動をより多くの方に知っていただき、応援頂けるよう『ＭＥＷ通信』の発行を継続していきたいと思います。（山本紀之）

- 1992年創刊、年４回発行、600部、A4判、４頁、会員、関係機関へ発送
- 年会費：2000円（賛助会員）
- tel：0422-38-7661
- E-mail：mew.honbu@gmail.com
- 当館所蔵：60（2007年）～127号
- 127号（2024年２月）内容＝法人全体研修会報告、各事業所活動報告、メンバー企画プログラム紹介他

市民アーカイブ多摩の資料棚から⑰〈高齢者・その2〉

当館が所蔵する「69高齢者」のミニコミ紹介の後半。号数の後の〈括弧内〉は発行年。

【介護福祉施設】

介護福祉施設を運営する団体が発行するミニコミ。

『コスモス通信』を発行する「地域福祉サービス協会コスモス国立」は訪問介護、居宅介護支援、グループホーム、デイサービス、夜間対応型訪問介護の事業を展開。2016年に「協会」の事業を「三多摩福祉会」が引き継ぐ。グループ内に8つある訪問介護事業所のうち「コスモス国立」が発行。携わる職員の自己紹介が記事の中心。所蔵は04年11月号～15年3・4月号。

『至誠ホームだより』（至誠ホーム）は、東京多摩地区（立川・国分寺・調布）を拠点に事業を展開する至誠グループの高齢者福祉情報誌。同グループは、見守り付きの高齢者専用住宅からケアハウス、特別養護老人ホーム、グループホーム、デイサービス、訪問介護まで幅広い事業を行う。それぞれの施設に、アウリンコ、キートス、オンニ、ミンナといったフィンランド語の名称がつく。職員数720人のうち外国籍スタッフが約70人。彼らは40時間勤務のできる契約社員で、そのうち15人が介護福祉士に合格。介護現場を支える外国籍労働者の声も載る。所蔵は239号〈01〉～366号〈24〉。ほかに至誠ホームの関連施設が発行するものとして**『こんにちはキートです』**（至誠キートスホーム）と**『あっとほーむ―皆様とともにつくる緑寿園だより―』**（至誠学舎東京緑寿園）をわずかだが所蔵する。

『年輪通信』（サポートハウス年輪）は、1994年田無の市民グループ「バウムクーヘン」が創刊。2010年からはA4判8頁のカラーで年4回発行。サポートハウス年輪は、ケアプラン作成、デイサービス、グループホーム、食事サービスなども手掛ける。本誌15号に紹介あり。当館所蔵13号〈97〉～207号〈24〉

『ゆいまある』を発行する「地域ケアネットワークゆいまある」は1999年、介護保険制度実施に先駆けて設立された。東久留米市を拠点に事業所を展開し、デイサービスや小規模多機能型居宅介護を行う。2021年以降の発行号はHPでも見ることが出来る。本館所蔵は1号〈99〉～14号〈04〉。記事には、お祭、配食サービス、防災訓練、総会や研修会の報告などが載る。

【ボランティア・就業支援】

高齢者の就業やボランティア活動を支援するミニコミ。

『いぶし銀　国立市シルバー人材センターニュース』は国立市シルバー人材センターの会報。シルバーを対象にした就業支援講習のお知らせ、包丁研ぎ、縫製、襖の張り替えといった会員の業務や声を紹介する。124号〈02〉～186号〈24〉を所蔵。

『げんき』を発行するのは「八王子高齢者コーディネートセンター」。特技・技術を持つ60歳以上の人でボランティア活動に興味のある人を登録し、必要とする人々とマッチングする。記事には、お手玉、福祉アート、書道、傾聴（高齢者の話を聞く技術を身に付ける）講座など、福祉施設に向けたボランティア養成講座の紹介が特徴。所蔵は6号〈05〉～72号〈19〉

『シルバーひがしくるめ』は公益社団法人・東久留米市シルバー人材センターが発行。ホームセンターのカートの移動整理、公園の清掃、小学校の施錠開錠など、会員の仕事ぶりや趣味を紹介。登録会員数は1100余り、事務局の職員は11名である。所蔵は101号～115号〈24〉。

【年　金】

年金に関するミニコミも所蔵されている。

『年金者しんぶん』は「全日本年金者組合中央本部」の機関紙

ネットワーク・市民アーカイブ2024　定期総会報告
法人化・目録作成・多様な参加

6月16日（日）11時から12時30分まで、2024年度定期総会を開催しました。正会員14人（委任状25人）の参加がありました。

23年度の活動実績として、例年通り開館を継続し、来館者や収集状況、法人化と目録作成に向けての活動、他団体・機関との協働・連携などの事業報告と決算報告があり、質疑応答のあと、拍手で承認されました。

24年度事業計画は例年通りの開館業務や集会等の開催、通信発行に加え、①長期計画を立案しながら法人化の実現を目指す、②目録作成に取り組む、③多様な参加の形を模索を挙げました。長期計画の1つであるNPO法人化については別議案「25年度のNPO法人化設立と準備」として詳細を説明し、質疑応答を経て全員挙手で承認。24年度予算も拍手で承認されました。

24年度の運営委員は、23年度から継続の8人に加え、当日参加会員から募集し、大出春江さんが加わってくださることになり、承認されました。

質疑応答や意見としては、「紙で発行されるミニコミの全体状況の把握・議案に記述する必要性」「長期計画策定の進捗状況」「決算・予算表の改善」「法人化の必要性の確認」「認証・認定NPO法人の違い」などがありました。

総会終了後は自己紹介やご自身が関わっている活動などを話ながら交流しました。

運営委員会の他に、広報・企画部会、長期計画・目録プロジェクトも引き続き活動し、会員であればどなたも参加歓迎です。市民アーカイブ多摩の資料整理や収集ボランティアなども募集しています。今年度もよろしくお願いいたします。

（江頭晃子＝事務局・運営委員）

である。同組合は1989年に結成され、47都道府県に地方本部を置き、全国に900を超える地方支部がある。317号〈16〉～410号〈24〉を所蔵。当館では同組合地方支部の発行するミニコミとして『年金ニュース　東京』（東京都本部）、『これからが・本番』（全日本年金者組合東京都本部千代田支部・金融班）、『ねんきん国立』（国立支部）、『ねんきん東村山』（東村山支部）、『ねんきん武三』（武蔵野三鷹支部）を所蔵する。共通する特徴は、年金制度や年金に関する問題だけでなく、ウクライナ問題や首相国葬問題などの政治課題、環境問題、経済問題などを積極的に論じていることである。

『銀行年金を守る会ニュース』は出口戦略のないアベノミクスと黒田日銀総裁らリフレ派による金融緩和政策が市場を歪め、年金基金を危険にさらしていることを指摘する論調が特徴。寄稿者は主に企業年金を受け取る銀行員OBであり、金融の専門性と企業年金の当事者意識に支えられた議論が興味深い。所蔵は74号〈19〉～81号〈21〉で年3回発行。

高齢者の資料棚については、欠号も多く会報や通信類が途絶えてしまっているものが目についた。すそ野が広い分野であり、網羅的に収集することは不可能だとしても、ファイルがあるものについては欠号の補てんと通信類の継続的収集が必要だと感じた。

（吉田明＝会員・資料整理ボランティア）

リレーエッセイ〈市民アーカイブ多摩のひと〉⑦

記憶の糸をたぐれば…

中村光一　資料収集スタッフ

金属製の脚や腕をむき出しにし、戦闘帽に白装束をまとった元兵隊さんたちが、街頭や電車内で小箱を差し出し、お金を乞うていました。走る都電から見えた風景は、空襲で焼け焦げて中がガランドウの焼けビルの連続でした。今は老人ホームに身を置く私の戦後・幼少期の強烈な記憶です。

アジア太平洋戦争開戦の1941年に生を受け、新憲法施行の47年、満開の桜のもとで小学生になりました。教室は午前と午後で学年が入れ替わる二部授業。戦災で校舎不足だったのでしょう。まだ机や椅子がなく、床にべたっと座って黒板を見上げて授業を受けました。消しゴムは全員に行き渡らず、くじ引きです。給食の汁物には青っぽい油と正体不明の肉（食用蛙？）が浮いていました。飢餓の戦後、それはララ※物資だったのか。

一方で、今思えば先生たちは生き生きとしていました。授業中に先生が童話を聞かせたり、クラス皆で電報ゲームをしたり、親も呼んでクラスだけの学芸会をしたりと、当時は先生たちを縛るものがなく、教室は創意工夫に満ちた場だったように思います。

しかし、その後の学校時代に「戦争の時代」を学んだ記憶はなく、日本のアジア諸国への加害の事実を知ったのは、社会人になってからでした。

加害といえば、原爆の副産物・原発が生む廃棄物は超長期にわたり放射線を出し続け、遺伝子を傷つける、未来世代に押しつけるツケ（加害）そのものです。

私が市民アーカイブ多摩で、戦時加害の償いに向き合う人たち、戦争への動きをとどめようとする人たち、脱原発団体の取り組みを残しておきたいのは、根っこに幼少期の記憶があるからかもしれません。

※日系人や宗教者等による米国の民間団体LARA（Licensed Agencies for Relief in Asia：アジア救援公認団体）からの支援物資。

（なかむら・こういち＝会員・資料収集担当）

第10期　緑陰（りょくいん）トーク

◇第3回　7月27日（土）

戦争体験を今に伝える
―『川田文子さんのこと』を作って

山澤遥乃さん
山澤綾乃さん
高野慎太郎さん
（自由学園）

◇第4回　9月28日（土）

「御門訴事件（ごもんそじけん）」と出会って
―〝歴史〟と〝思い〟を伝える

草川幸子さん
（『御門訴事件を伝える活動の記録』編集者）

・会場：市民アーカイブ多摩（8頁地図）
・時間：午後4時15分～6時
・定員：30人（要申込・先着順）
・参加費：300円

市民アーカイブ多摩の四季⑰

夏　タイワンホトトギス

鳥か風か誰が種を運んできてくれたのか……。ヤマモモの木の下の日陰で毎年個性豊かな花を咲かせてくれます。

秋に咲き、花にある斑の模様が野鳥のホトトギスを思わせることから、同じ植物名を持つホトトギスの仲間（ユリ科）です。東アジアからインドにかけて20種ほどがあり、日本には半数以上の12種が知られています。台湾にもあるタイワンホトトギスは沖縄島、西表島に自生していますが、庭で栽培されるタイワンホトトギスはそれらとは由来が違うことがわかってきました。栽培しやすく、花が枝分かれした茎の先について目立つことから、一般に普及しています。花をよく見ると、ホトトギスの斑のほか、外側の花弁の根本にある距（きょ）という蜜を貯めるための袋や、雌しべの先が大きく3つに分かれ、さらに2つに分かれて反り返っており、透明な突起をつけていることなどに気付きます。白いトゲトゲのある幼虫がいたらそれはルリタテハです。取らずに見守ってあげてください。

（邑田仁（むらたじん）＝元東大小石川植物園園長）

アーカイブ多摩日誌

◇法人化を目指して

今年3月に会員対象に「法人化と募金運動について」のアンケートを実施し、多くの賛同を得ました。総会での議決を経て、NPO法人化を目指して具体的に動き始めます。当会設立から18年、市民アーカイブ多摩開館から丸10年になります。資料が一番の財産ですが、その資料を守るために組織基盤を強化していきます。

◇2023年度データ

23年度事業のうち、実績データを一部ご紹介します。①開館日72日。②来館者数207人。③データ入力数31120点。④新ファイル作成数56タイトル。⑤ファイル総数21120タイトル。来館者・ボランティア・当番を含めると512人の来館がありました。

◇資料整理・収集、目録づくりボランティア募集中

「こんな考えや活動があったとは！」と目から鱗のミニコミの資料整理、新たな目録づくりの確認作業など、ご一緒してくださる方、お待ちします。

◇環境アーカイブズ閲覧再開

02年以前のミニコミや市民活動資料・図書を当会から寄贈した法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズが、4月から専任教員とアーキビストの不在により閲覧停止になっていましたが、7月1日から再開されるとのことです。

◇毎日新聞とアサココに

当館10周年の記事が毎日新聞（2月14日）とアサココ（6月6日）に掲載されました。

◇夏季休館

8月10日(土)、14日(水)、は休館日となります。

運営委員会など

2月12日　「市民活動資料の保存・活用次の10年を描く」開催。参加者23人。

2月13日　第11回運営委員会、参加者3人。会員・カンパ者、当番予定、来館者・各部会から報告（以下毎回）。集会感想・反省、24年度の緑陰トーク、各部会・プロジェクト課題、総会議案検討。

3月12日　第12回運営委員会、参加者6人。24年度活動の柱確認、各部会・プロジェクトの課題、総会議案書読み合わせて確認、運営委員候補、事務局費、法人化議案名称検討他。

4月28日　第1回運営委員会、参加者7人（オンライン1人）。24年度総会議案書最終確認、法人化アンケート結果報告・議案、運営委員候補、法政大環境アーカイブズ閲覧停止について他。

5月14日　第2回運営委員会、参加者4人。23年度運営委員・当番・ボランティア体制確認、総会&講演会役割分担、法政大学連携、総会・講演会・緑陰トーク役割分担、アーカイブ通信31号内容。

5月25日　第1回緑陰トーク開催（話し手：小林えみ）。参加者16人。

会員数（2024年5月）

169（正会員62人　賛助会員107人・6団体）

◆新規入会ありがとう

（賛助会員）

岡部明子さん　小林えみさん

千野孝夫さん　宮崎真紀子さん

カンパありがとう（2024年2～5月）

赤倉昭男さん　新井勝紘さん

川上和子さん　鈴木美和子さん

住田啓子さん　戸井田久美子さん

富窪高志さん　中村光一さん

橋本きよ子さん　平野　泉さん

堀内寛雄さん　松井隆志さん

松浦幸子さん　山口源治郎さん

吉田美子さん　鷲尾真由美さん

渡辺　樹さん　匿名2人

会員の声

・多摩地域図書館の地域資料の現状などを聞く機会を作っては。

・ボランティア運営の高麗博物館もNPO法人で対応できています。元銀行員の力をお借りしています。

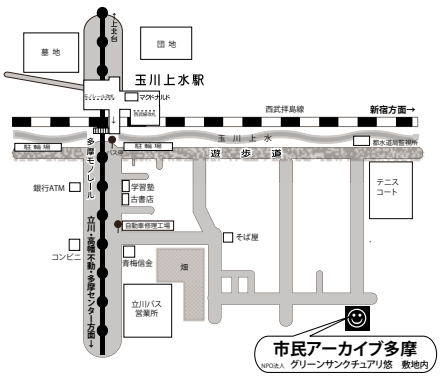
・法人化等の会員アンケート結果が大変詳しく、多くの方が回答されていて感動しました。貴重な市民活動資料を誰でも見ることのできる当館を守って、次世代につなげていきたいですね！

・「他者」を記録する主体としての市民アーカイブの日々の活動そのものが大切な「記録」の対象と感じます。活動内容を的確に表している議案書と思います。

編集後記

当会にも高齢化がやってきて、体調不良や家族の介護が目立つ。私も家で転倒、当番キャンセルの連絡をすると、他のメンバーも腰を痛めて入院というメールが…若者（60代）よ来たれ！（江・鈴・増・佐）

【市民アーカイブ多摩利用案内】



・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日（年末年始・8月中旬休館有）

・開館時間：午後1時～4時　　・入館カンパ：100円～

・所在地：東京都立川市幸町5－96－7

（多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分）

・tel･fax：042－536－5535（電話は開館中のみ）

・見られる資料：市民団体や個人が発行するミニコミ（通信や会報等）

◆会員・カンパ募集中　～市民の活動を過去・現在・未来につないでください～

・正会員1口6,000円/年　・賛助会員1口3,000円/年　※団体会員2口～

ゆうちょ銀行　振替口座00120-9-729226　口座名：市民アーカイブ

※他銀行から　〇一九（ゼロイチキュウ）店（019）当座　0729226